

高齢女性の別居子の居住場所

—高齢女性の住む地域の人口規模が別居子の居住場所に及ぼす効果の探究—

野邊 政雄

本稿の目的は、岡山県高梁市農村部、高梁市市街地、岡山市に住む高齢女性の調査データを分析し、高齢女性が人口規模の相違した地域に住んでいることによって、別居子の居住場所にどのような差異があるかを究明することである。生活関連施設、行政機関、商業施設、医療施設は農村部ではなく、高齢者は高梁市の農村部では暮らしづらいと考えられるけれど、多くの高齢者が農村部に住み続けている。データの分析によって、農村部の高齢女性には、別居子が同じ市内にあまりいないけれど、「岡山県内」にある近くの人口規模が大きい都市に多くの別居子がいることを明らかにした。そうした別居子の支援のおかげで、高齢女性は農村部に住み続けられると考えられる。

Keywords :高齢女性、別居子、居住場所、高梁市、ソーシャル・サポート

1 本稿の目的

同居子に次いで、別居子は高齢者にとって重要な交際相手であるだけでなく、ソーシャル・サポートの大切な源泉でもある（前田 1988; 野口 1991; 横山ほか 1994）。手段的サポートの授受をおこなったり、交遊をしたりするには、直接相手と会うことが不可欠である。だから、成人した別居子（夫婦）が高齢者の近くに居住しているほど、高齢者はその別居子（夫婦）から手段的サポートを入手でき、その別居子（夫婦）とより頻繁に交遊をおこなうことができる。これに対し、情緒的サポートの授受は直接会つておこなうだけでなく、電話によってもおこなえる。そして、電話は現代社会で広く普及しているから、高齢者は電話で手軽に遠方に住む別居子（夫婦）とも連絡を取り合うことができる。そのうえ、電話料金は鉄道賃などと比べればそれほど高額ではない。だから、別居子（夫婦）との距離は、高齢者がその別居子（夫婦）から情緒的サポートを入手できるかどうかと関連していないと考えられる。大都市や地方中都市でおこなわれた先行研究では、そのことが実証されている（横山ほか 1994; 古谷野ほか 1995）。

ただし、地方小都市に住む高齢者は大都市や地方中都市の高齢者よりも収入が低い傾向があるから、前者には遠くに住む別居子（夫婦）への電話代といえども大きな出費である。だから、筆者が地方小都市である高梁市の高齢女性を対象におこなった調査（野邊 2003）では、高齢女性は遠くに住む別居子へ電話をかけることを控えていた。そして、別居子が近くに住むほど、高齢者はその別居子から手段的サポートを期待できたり、より頻繁に交遊をしていたりするだけでなく、その別居子から情緒的サポートをも期待できた。

いずれにせよ、別居子（夫婦）との距離は、高齢者がその別居子（夫婦）からサポートを入手できるかどうかに影響を及ぼす重要な要因なのである。だから、高齢者の別居子がどこに居住しているかを探究することは重要な研究課題だといえる。筆者は、地方小都市である岡山県高梁市の農村部（以下では、「農村部」と略す）、高梁市の市街地（以下では、「市街地」と略す）、および地方中核都市である岡山県岡山市で高齢女性を対象に調査をおこなった。本稿では、その調査データを分析し、高齢女性が人口

岡山大学教育学部社会科教育講座 700-8530 岡山市津島中3-1-1

The Location of the Children of Elderly Women: An Investigation into the Effects of Urbanisation on the Location of their Children

Masao NOBE

Department of Social Studies Education, Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Okayama City 700-8530

表1 標本特性

	農村部の高齢女性 (347人)	市街地の高齢女性 (176人)	岡山市の高齢女性 (347人)
回答者の職業			
農林漁業従事者	35.4%	2.8%	3.6%
事務的職業	0.3%	2.3%	3.6%
販売的職業	1.4%	5.7%	9.5%
サービス的職業	3.7%	2.3%	3.6%
生産工程従事者	2.3%	2.3%	3.6%
専門的職業	0.3%	1.8%	3.0%
管理的職業	0 %	0.6%	1.2%
無職	56.5%	80.7%	75.7%
回答者の学歴			
旧制小学校卒業	13.8%	14.2%	9.5%
旧制高等小学校卒業	59.4%	32.4%	13.0%
旧制(高等)女学校・実業学校・師範学校卒業	25.4%	51.1%	70.4%
旧制高専・旧制(女子)大学卒業	1.4%	2.3%	7.1%
夫婦の年収(単身の場合は、個人の収入。年金を含む)			
200万円以下	64.8%	42.6%	33.1%
200万-400万円	27.7%	41.5%	39.1%
400万円以上	6.3%	15.9%	26.0%
不明	1.2%	—	1.8%
平均年収	177.11万円 (標準偏差 132.87)	248.30万円 (標準偏差 180.86)	320.78万円 (標準偏差 232.32)
家族形態			
回答者のみ	14.1%	23.9%	18.9%
夫婦のみ	34.9%	25.6%	36.1%
回答者+子供(夫婦)	7.8%	5.1%	8.9%
回答者+子供(夫婦)+孫	14.1%	20.5%	13.6%
夫婦+子供(夫婦)	8.9%	6.3%	8.3%
夫婦+子供(夫婦)+孫	18.2%	14.2%	10.7%
その他	2.0%	4.5%	3.6%
回答者の年齢			
65-69歳	35.4%	34.1%	48.5%
70-74歳	37.8%	33.5%	30.8%
75-79歳	26.8%	32.4%	20.7%
平均年齢	71.49歳 (標準偏差 4.02)	71.77歳 (標準偏差 4.25)	70.47歳 (標準偏差 4.05)

規模の相違した地域に住んでいることによって、別居子の居住場所にどのような差異があるかを究明したい。後述するように、高梁市の農村部では生活環境が整っていないにもかかわらず、多くの高齢者がそこに暮らしている。この究明を通して、高齢者はそうした地域に住み続けられる理由を明らかにしたい。

2 調査の概要

(1)調査方法

高梁市は岡山県西部の内陸にある。1995年における人口は、26,072人である(国勢調査による)。高梁町とその周辺にある8村が1954年に合併し、高梁市が成立した。その後も2度にわたり周辺の農村地域を合併した。高梁市は周辺の農村をこのように合併したので、中山間地の農村が市街地の外側に広がっている。

「高梁市高齢女性調査」と呼ぶ調査を次のように実施した。調査対象者を高梁市に居住する65歳以上80歳未満の女性とした。住民基本台帳によれば、1997年11月現在、その年齢帯の高齢女性は2,764人

いた。その女性の中から22%にあたる609人を住民基本台帳にもとづく単純無作為抽出によって抽出した。そして、調査員が1997年12月から翌年の1月31日までの間に該当する女性を訪問し、面接調査をおこなった。有効票数は523であり、無効票数は86であった。回収された有効票数を該当する人がいた調査対象者数(転居を除いた608)で除した割合を回収率とすると、回収率は86.0%であった。ところで、高梁市役所は市街地化が進んだ地域を市街地と定めている。本稿では、高梁市役所が定めたこの地域を市街地とする。そして、それ以外の地域を農村部とする。農村部と市街地に住む標本の特性は、表1の通りである。

岡山市は岡山県の県庁都市であり、商業都市的性格が強い。岡山市は1890年の市政施行によって誕生した。その後、隣接する町村を次々に編入し、市域を拡大していったため、岡山市の周辺部には広大な農村地帯が広がっている。農村地帯は調査目的に合わないから、周辺の農村地帯を調査地とはしなかった。1952年4月までの合併で岡山市となった同市の中心部だけを調査地とした。

表2 居住場所ごとの別居子の平均人数（単位：人）

	近隣地域	市内	岡山県内	岡山県外	合計	標本数
同居子あり						
農村部の高齢女性	0.06 (0.25)	0.36 (0.59)	0.91 (0.97)	0.48 (0.81)	1.82 (1.18)	170
市街地の高齢女性	0.20 (0.51)	0.16 (0.37)	0.68 (0.85)	0.51 (0.74)	1.54 (1.15)	81
岡山市の高齢女性	0.13 (0.37)	0.49 (0.63)	0.18 (0.51)	0.43 (0.73)	1.22 (1.06)	72
同居子なし						
農村部の高齢女性	0.05 (0.24)	0.29 (0.55)	1.45 (1.23)	0.69 (0.82)	2.49 (1.17)	177
市街地の高齢女性	0.13 (0.39)	0.22 (0.53)	0.86 (1.06)	0.92 (1.09)	2.14 (1.33)	95
岡山市の高齢女性	0.18 (0.46)	0.77 (0.98)	0.20 (0.51)	0.75 (0.80)	1.90 (1.11)	97

(注) 括弧内の数字は、標準偏差。

「岡山市高齢女性調査」と呼ぶ調査は次のように実施した。選挙人名簿から60歳以上80歳未満の女性500人を無作為抽出した。そして、調査員が1995年2月15日から2月20日までの間に該当する女性を訪問し、面接調査をおこなった。有効票数は283であり、無効票数は217であった。回収率は58.2%であった。この調査の標本は、高梁市の調査のそれと年齢で違いがある。両調査の標本の年齢を一致させるために、標本のうち60歳以上65歳未満の高齢女性を除いた。本稿で分析する65歳以上80歳未満の高齢女性の標本数は169である。岡山市に住む標本の特性は、表1の通りである。

(2) 分析方法

本稿では、高梁市の農村部、高梁市の市街地、岡山市に居住する高齢女性には別居子がどこにいるかを分析する。人口規模が小さい地域から大きい地域に地域を並べると、農村部、市街地、岡山市の順になることは言うまでもない。ところで、同居子がいるかどうかによっても、別居子の居住場所が大きく相違すると予想できる。そこで、同居子のいる回答者とそれがいない回答者に2分したうえで、別居子の居住場所を見てゆく。農村部、市街地、岡山市に住む回答者の標本特性は、表1に示す通りである。

別居子の居住場所は、①歩いて15分以内の地域（本論文では、「近隣地域」と呼ぶ）、②（近隣地域を除外した）高梁市の高齢女性にとっての高梁市内、ないし岡山市の高齢女性にとっての岡山市内（本稿では、「市内」と呼ぶ）、③（「近隣地域」と「市内」を除外した）岡山県内、④岡山県外（外国を含む）、の4つに分けた。別居子が「岡山県内」に居住しているとき、どの市町村に住んでいるかを更に聞いた。また、別居子が「岡山県外」に居住しているとき、どの都道府県に住んでいるかも尋ねた。

3 結果

(1) 別居子の居住場所

人口規模が相違する3つの地域に住む回答者の別居子はどこに住んでいるかを見たい。同居子のいる回答者とそれがいない回答者に2分して、別居子が「近隣地域」、「市内」、「岡山県内」、「岡山県外」それぞれに平均して何人いるかを集計し、表2に示す¹⁾。

回答者の居住する地域と同居子の有無を独立変数とし、それぞれの地域に住む別居子の人数を従属変数として二元配置の分散分析をおこなった。まず、「近隣地域」にいる別居子の人数を従属変数にした分析で統計的有意水準に達したのは主効果である回答者の居住する地域（F値 6.68, $p<.01$ ）のみであり、主効果である同居子の有無（F値 0.17, $p>.05$ ）と両者の交互作用（F値 1.25, $p>.05$ ）は有意ではなかった。次に、「市内」にいる別居子の人数を従属変数にした分析で統計的有意水準に達したのは主効果である回答者の居住する地域（F値 21.98, $p<.01$ ）および相互作用（F値 4.56, $p<.05$ ）であり、主効果である同居子の有無（F値 3.32, $p>.05$ ）は有意ではなかった。また、「岡山県内」にいる別居子の人数を従属変数にした分析では、回答者の居住する地域（F値 59.99, $p<.01$ ）や同居子の有無（F値 9.95, $p<.01$ ）といった主効果、および両者の交互作用（F値 4.67, $p<.05$ ）いずれもが有意であった。それから、「岡山県外」にいる別居子の人数を従属変数にした分析で統計的有意水準に達したのは主効果である同居子の有無（F値 22.39, $p<.01$ ）のみであり、主効果である回答者の居住する地域（F値 1.54, $p>.05$ ）と両者の交互作用（F値 0.87, $p>.05$ ）は有意ではなかった。最後に、別居子の合計人数を従属変数にした分析で統計的有意水準に達したのは回答者の居住する地域（F値 14.92, $p<.01$ ）と同居子の有無（F値 46.39, $p<.01$ ）といった主効果であり、

両者の交互作用 (F 値 0.07, $p>.05$) は有意ではなかった。この分散分析と表 2 から、次の 6 点が分かる。

第 1 に、農村部に住む回答者には、市街地や岡山市に住む居住者よりも「近隣地域」に別居子がいることである。このことは、同居子がいる回答者にもいない回答者にもいえる。数値を示せば、「近隣地域」に住む別居子はもともと少ないけれど、同居子のいる農村部の回答者にはそこに住む別居子が平均 0.06 人、同居子のいない農村部の回答者にはそうした別居子が平均 0.05 人いるにすぎない。

第 2 に、岡山市に住む回答者には「市内」に住む別居子が多いが、同居子のいない回答者はとくにそうであることだ。数値をあげると、同居子のいる岡山市の回答者には「市内」にいる別居子が平均 0.49 人おり、同居子のいないそうした回答者では「市内」に別居子が平均 0.77 人もいる。

第 3 に、農村部に住む回答者には「岡山県内」に住む別居子が多いが、同居子のいない回答者はとくにそうであることだ。数値を示せば、農村部に住む同居子のいる回答者には「岡山県内」に別居子が平均 0.91 人おり、同居子のいないそうした回答者には「岡山県内」に別居子が平均 1.45 人もいる。

第 4 に、同居子が回答者にいる場合といない場合とに分けて見ると、「岡山県外」に住む別居子の人数は回答者の居住する地域によって有意差がないことだ。同居子のいる回答者を例に引くと、農村部に住む回答者には「岡山県外」の別居子が 0.48 人、市街地に住む回答者にはそうした別居子が 0.51 人、岡山市に住む回答者にはそうした別居子が 0.43 人おり、これらの人数の間に有意差はない。

表 3 「岡山県内」にいる別居子の居住する市町村（単位：人）

	農村部の高齢女性	市街地の高齢女性	岡山市の高齢女性
同居子あり			
岡山市	53 (34.2%)	23 (41.8%)	--- (---)
倉敷市	33 (21.3%)	12 (21.8%)	5 (38.5%)
総社市	15 (9.7%)	8 (14.5%)	1 (7.7%)
津山市	0 (0 %)	0 (0 %)	0 (0 %)
賀陽町	8 (5.2%)	0 (0 %)	0 (0 %)
その他の市町村	46 (29.7%)	12 (21.8%)	7 (53.8%)
合 計	155 (100%)	55 (100%)	13 (100%)
同居子なし			
岡山市	84 (32.8%)	32 (36.4%)	--- (---)
倉敷市	88 (34.4%)	13 (14.8%)	6 (31.6%)
総社市	31 (12.1%)	10 (11.4%)	1 (5.3%)
津山市	0 (0 %)	0 (0 %)	5 (26.3%)
賀陽町	3 (1.2%)	5 (5.7%)	0 (0 %)
その他の市町村	50 (19.5%)	28 (31.8%)	7 (36.8%)
合 計	256 (100%)	88 (100%)	19 (100%)

(注) 括弧内の数字は、パーセンテージ。

第 5 に、「岡山県内」や「岡山県外」にいる別居子の人数は同居子がいるかどうかによって有意差があり、同居子のいない回答者には同居子のいる回答者よりも両地域に多くの別居子がいることだ。例えば、同居子のいる農村部の回答者には「岡山県外」に住む別居子は平均 0.69 人いるのに対し、同居子のいない農村部の回答者にはそうした別居子は平均 0.48 人いるにすぎない。

第 6 に、別居子の合計人数は回答者の居住する地域と同居子の有無によって有意差があることだ。そして、回答者が人口規模の小さい地域に居住しているほど回答者には多くの別居子があり、同居子のいない回答者には同居子がいる回答者よりも多くの別居子がいる。

(2) 「岡山県内」の別居子の居住場所

「岡山県内」にいる別居子は、岡山県内のどの市町村に居住しているかを見たい。例えば、農村部の同居子がいる回答者には「岡山県内」に住む別居子は平均して 0.91 人おり、回答者の人数は 170 人であるので、すべてのそうした回答者には合計して 155 人の「岡山県内」に住む別居子がいる。こうした「岡山県内」に住むすべての別居子は岡山県内のどの市町村に住んでいるかを回答者の居住する地域と同居子の有無別に集計し、その結果を表 3 に示す。同表から、次の 3 点を読み取ることができる。

第 1 に、農村部に住む回答者には、岡山市、倉敷市、総社市といった高梁市に近い市に住む別居子が多いことである。このことは、同居子がいる回答者にもいない回答者にもいえる。同居子のいる回答者では、「岡山県内」にいる別居子の 34.2% が岡山市に、

21.3%が倉敷市に、9.7%が総社市に居住している。同居子のいない回答者では、「岡山県内」にいる別居子の32.8%が岡山市に、34.4%が倉敷市に、12.1%が総社市に居住している。

第2に、市街地に住む回答者には、別居子が岡山市に圧倒的に多いことである。このことは、同居子がいる回答者にもいない回答者にもあてはまる。同居子のいるそうした回答者ではすべての「岡山県内」にいる別居子の41.8%が岡山市におり、同居子のいないそうした回答者ではすべての「岡山県内」にいる別居子の36.4%が岡山市にいる。

第3に、岡山市に住む回答者には倉敷市に住む別居子が多いことである。このことは、同居子がいる回答者でもいない回答者でもそうである。岡山市に住む回答者には「岡山県内」の別居子はもともと少ないが、約3分の1の別居子は倉敷市に居住している。同居子のいない岡山市に住む回答者には、津山市に住む別居子も多い。

(3) 「岡山県外」の別居子の居住場所

「岡山県外」にいる別居子は、岡山県以外のどの地方に居住しているかを見たい。例えば、農村部の同居子がいる回答者には「岡山県外」に住む別居子は平均して0.48人おり、回答者の人数は170人であるので、すべてのそうした回答者には合計して81人の「岡山県外」に住む別居子がいる。こうした「岡山県外」に住むすべての別居子はどの地方に住

んでいるかを回答者の居住する地域と同居子の有無別に集計し、その結果を表4に示す。同表から、次の2点を読み取ることができる。

第1に、農村部や市街地に住む回答者には関西地方に圧倒的に多くの別居子がいることである。このことは、同居子がいる回答者にもいない回答者にもいえる。数値をあげれば、農村部に住む同居子のいる回答者では「岡山県外」に居住する別居子の58.0%が近畿地方におり、農村部に住む同居子のいない回答者では「岡山県外」に居住する別居子の46.3%がそこにいる。また、市街地に住む同居子のいる回答者では「岡山県外」に居住する別居子の53.7%が近畿地方におり、市街地に住む同居子のいない回答者では「岡山県外」に居住する別居子の51.1%がそこにいる。

第2に、岡山市の回答者には関東地方に相対的に多くの別居子がいることである。このことは、同居子がいる回答者にもいない回答者にもあてはまる。数値をあげれば、同居子のいる岡山市に住む回答者では「岡山県外」に居住する別居子の41.9%が関東地方におり、同居子のいない岡山市に住む回答者では「岡山県外」に居住する別居子の32.9%がそこにいる。ただし、岡山市の回答者には関東地方に次いで関西地方にも多くの別居子がいる。

(4) 最も近くにいる別居子の居住場所

別居子からのソーシャル・サポートの入手のしやす

表4 「岡山県外」にいる別居子の居住する地方（単位：人）

	農村部の高齢女性	市街地の高齢女性	岡山市の高齢女性
	同居子あり		
北海道地方	0 (0 %)	0 (0 %)	0 (0 %)
東北地方	0 (0 %)	0 (0 %)	0 (0 %)
関東地方	20 (24.7%)	9 (22.0%)	13 (41.9%)
中部地方	7 (8.6%)	5 (12.2%)	2 (6.5%)
近畿地方	47 (58.0%)	22 (53.7%)	11 (35.5%)
中国地方	3 (3.7%)	4 (9.8%)	4 (12.9%)
四国地方	2 (2.5%)	1 (2.4%)	1 (3.2%)
九州地方	1 (1.2%)	0 (0 %)	0 (0 %)
外 国	1 (1.2%)	0 (0 %)	0 (0 %)
合 計	81 (100%)	41 (100%)	31 (100%)
	同居子なし		
北海道地方	1 (0.8%)	1 (1.1%)	1 (1.4%)
東北地方	1 (0.8%)	0 (0 %)	1 (1.4%)
関東地方	24 (19.5%)	25 (28.4%)	24 (32.9%)
中部地方	3 (2.4%)	3 (3.4%)	7 (9.6%)
近畿地方	57 (46.3%)	45 (51.1%)	22 (30.1%)
中国地方	17 (13.8%)	9 (10.2%)	11 (15.1%)
四国地方	10 (8.1%)	3 (3.4%)	4 (5.5%)
九州地方	8 (6.5%)	0 (0 %)	1 (1.4%)
外 国	2 (1.6%)	2 (1.6%)	2 (2.7%)
合 計	123 (100%)	88 (100%)	73 (100%)

(注) 括弧内の数字は、パーセンテージ。

すさを判断するために、回答者のすべての別居子がどこに居住しているかをこれまで見てきた。しかし、この分析には、次のような欠点がある。たとえ回答者の大部分の別居子が遠方に住んでいても、1人の別居子が近くに居住していれば、その人から日常生活をおくるのに必要なソーシャル・サポートを入手できるかもしれない。だから、回答者のすべての別居子がどこに居住しているかを見るだけでは、別居子からソーシャル・サポートを入手しやすいかどうかを正確には判断できない。この欠点を補うために、同居子のいる回答者とそれがいない回答者に2分して、最も近くに居住している別居子が「近隣地域」、「市内」、「岡山県内」、「岡山県外」それぞれにいる回答者の人数を集計した。その結果は、表5の通りである。同居子のいる回答者についてのクロス集計表と同居子のいない回答者についてのクロス集計表それぞれごとに χ^2 検定をおこなったところ、いずれも1%水準で有意であった。表5から、次の2点を

読み取ることができる。

第1に、農村部の回答者では最も近くの別居子が「岡山県内」にいる回答者の割合は高く、これに次いでそうした別居子が「市内」に住む回答者の割合は相対的に高いことだ。農村部に住む同居子のいる回答者のうち最も近くの別居子が「岡山県内」にいる割合は40.6%であり、「市内」にいる割合は29.4%である。また、農村部に住む同居子がない回答者における対応するそれぞれの割合は55.9%と23.2%である。したがって、農村部の回答者の大部分には、「近隣地域」、「市内」、「岡山県内」のいずれかに少なくとも1人の別居子がいる。同居子がないとした回答者のうち、最も近くの別居子がそれらの地域のいずれかにいる回答者は82.6%にもなる。同居子のいる回答者でもその割合は76.5%にもなる。したがって、「岡山県外」にしか別居子のいない農村部に住む回答者の割合はとても低い。

表5 最も近くに住む別居子の居住場所（単位：人）

	近隣地域	市 内	岡山県内	岡山県外	合 計	標本数
同居子あり						
農村部の高齢女性	11 (6.5%)	50 (29.4%)	69 (40.6%)	15 (8.8%)	25 (14.7%)	170 (100%)
市街地の高齢女性	12 (14.8%)	11 (13.6%)	30 (37.0%)	14 (17.3%)	14 (17.3%)	81 (100%)
岡山市の高齢女性	8 (11.1%)	27 (37.5%)	5 (6.9%)	12 (16.7%)	20 (27.8%)	72 (100%)
同居子なし						
農村部の高齢女性	8 (4.5%)	41 (23.2%)	99 (55.9%)	20 (11.3%)	9 (5.1%)	172 (100%)
市街地の高齢女性	10 (10.5%)	15 (15.8%)	39 (41.1%)	21 (22.1%)	10 (10.5%)	95 (100%)
岡山市の高齢女性	14 (14.4%)	42 (43.3%)	7 (7.2%)	22 (22.7%)	12 (12.4%)	97 (100%)

(注) 括弧内の数字は、パーセンテージ。

第2に、岡山市の回答者の中に、最も近くの別居子が「市内」にいる回答者は相対的に多いことである。このことは、同居子が回答者にいるかどうかに関係なくいえる。最も近くにいる別居子が「市内」にいる割合は、同居子のいるとした回答者で37.5%，同居子のいないとした回答者で43.3%である。そこで、岡山市内に少なくとも1人の別居子がいる岡山市の回答者の割合は、同居子がいる回答者で48.6%，同居子がない回答者で57.7%になる。

4 検討

第1に、同じ市内にいる同居子を考察しよう。同じ市内にいるとは、本稿では「近隣地域」あるいは「市内」にいるということになる。「近隣地域」にいる別居子の人数と「市内」にいる別居子の人数は比例しているわけではない。例えば、農村部に住む高齢女性には「近隣地域」に別居子がほとんどないが、「市内」には市街地の高齢女性よりも別居子が

いる（表2を参照）。そこで、同じ市内にいる別居子の人数を見ておきたい。同じ市内にいる別居子の平均人数を高齢女性の居住する地域別に計算すると表6のようになる。高齢女性の居住する地域と同居子の有無を独立変数とし、同じ市内にいる別居子の人数を従属変数として二元配置の分散分析をおこなった。有意水準に達したのは主効果である高齢女性

表6 居住場所ごとの別居子の平均人数（単位：人）

	同じ市内	岡山県内のいずれか	標本数
同居子あり			
農村部の高齢女性	0.43 (0.62)	1.34 (1.06)	170
市街地の高齢女性	0.36 (0.62)	1.04 (0.98)	81
岡山市の高齢女性	0.61 (0.70)	0.79 (0.92)	72
同居子なし			
農村部の高齢女性	0.34 (0.60)	1.79 (1.25)	172
市街地の高齢女性	0.35 (0.65)	1.21 (1.20)	95
岡山市の高齢女性	0.95 (1.12)	1.14 (1.14)	97

(注) 同じ市内とは、「近隣地域」あるいは「市内」。岡山県内のいずれかとは、「近隣地域」、「市内」、あるいは「岡山県内」。括弧内の数字は、標準偏差。

の居住する地域 (F 値 19.92, $p < .01$) および交互作用 (F 値 2.56, $p < .01$) であり、主効果である同居子の有無 (F 値 1.93, $p > .05$) は有意ではなかった。

分散分析と表 6 から、岡山市の高齢女性には、農村部や市街地の高齢女性よりも同じ市内に多くの別居子がいるが、同居子がいないときによくその人数が多いことが分かる。数値をあげれば、岡山市に住む高齢女性の同じ市内にいる別居子の平均人數は、同居子がいるとき 0.61 人であり、同居子がないとき 0.94 人である。また、表 5 から少なくとも 1 人の別居子が同じ市内にいる高齢女性の割合を計算すると次のようになる。同居子がいるとき、農村部に住む高齢女性のその割合は 35.9%，市街地に住む高齢女性のその割合は 28.4%，岡山市に住む高齢女性のその割合は 48.6% である。同居子がないとき、農村部に住む高齢女性のその割合は 27.7%，市街地に住む高齢女性のその割合は 26.3%，岡山市に住む高齢女性のその割合は 57.7% である。このように、岡山市の高齢女性には、農村部や市街地の高齢女性よりも同じ市内に多くの別居子がいるうえに、少なくとも 1 人の別居子が同じ市内にいる割合も高い。

これは、次のような理由からだろう。人口規模が大きい地域ほど産業が発展しており、労働条件のよい就職先が多い。そこで、高齢女性が最も人口規模が大きい岡山市に住んでいるとき、子供やその配偶者は転出しないで、同じ市内で就職しやすい。その結果、岡山市の高齢女性には同市内に居住する別居子が多く、同市内に少なくとも 1 人以上の別居子がいる高齢女性の割合も高かったと考えられる。

第 2 に、岡山県内のいずれか（「近隣地域」、「市内」あるいは「岡山県内」）に居住する別居子を追究したい。同じ市内にいる別居子の人数と「岡山県内」にいる別居子の人数とは比例しているわけではない。例えば、農村部の高齢女性には同じ市内にあまり別居子がないけれど、「岡山県内」に多くの別居子がいる（表 2 を参照）。そこで、岡山県内のいずれかにいる別居子の人数はどうであるかを見ておきたい。高齢女性の居住する地域別に、岡山県内のいずれかにいる別居子の平均人數を計算し、やはり表 6 に示す。高齢女性の居住する地域と同居子の有無を独立変数とし、岡山県内のいずれかにいる別居子の人数を従属変数として二元配置の分散分析をおこなった。有意水準に達したのは高齢女性の居住する地域 (F 値 19.16, $p < .01$) および同居子の有無 (F 値 12.93, $p < .01$) であり、両者の交互作用 (F 値 0.88, $p > .05$) は有意ではなかった。

分散分析と表 6 から、農村部の高齢女性には、市街地や岡山市の高齢女性よりも岡山県内のいずれか

に多くの別居子があり、同居子がないときにその人數がより多いことが分かる。数値をあげれば、岡山県内のいずれかにいる別居子の平均人數は、農村部に住む同居子のいる高齢女性が 1.34 人であり、農村部に住む同居子がない高齢女性が 1.79 人である。さらに、農村部に住む高齢女性の「岡山県内」に居住する別居子は、ほとんどが岡山市、倉敷市、総社市といった高梁市に近い市町村に住んでいた（表 3 を参照）。つまり、農村部に住む高齢女性にとって、岡山県内のいずれかにいる別居子のほとんどは自動車に 1 時間以内で実家へ行ける場所に居住しているのだ。これらのことから、農村部の高齢女性には「近隣地域」あるいは「市内」に別居子はあまりいないけれど、近くにある人口規模のより大きい都市に多くの別居子がいるということとなる。さらに、農村部にいる高齢女性のほとんどには、岡山県内のいずれかに少なくとも 1 人の別居子がいた（表 5 を参照）。

このことから、高齢者が農村部に住み続けられる仕組みを知ることができる。高齢者にとっての生活上の大きな問題は買い物と病院への通院であるが、農村部では商業施設や医療施設はあまりない。そのうえ、生活関連施設や行政機関もほとんどない（野邊 2000a）。農村部の生活環境は整っていないうえに、大部分の高齢者は自動車を運転しない。だから、高齢者は農村部では暮らしづらいと考えられる。けれども、多くの高齢者が農村部に住み続けている。このことができる原因是、次のような理由からであると推論できる。既に指摘したように、成人した別居子（夫婦）が高齢者の近くに住んでいるほど、両親にさまざまなサポートを提供しやすい。さて、今日では、農村部といえども、就業者のほとんどは専業で農業に就いているわけではなく、企業に勤めている。年齢の若い人々では、よくにそのことがいえる。そして、一般的に言って、人口規模が大きい地域ほど、労働条件のよい就職先がある。すると、高齢者（夫婦）が農村部のような人口規模の小さい地域に住んでいるとき、別居子あるいはその配偶者は両親のいる地域で条件のよい仕事をなかなか見つけることはできない。だから、別居子（夫婦）の多くは両親が居住している地域から転出するので、別居子は同じ市内にあまりいない。しかし、別居子あるいはその配偶者は年老いた両親のもとから遠く離れて就職するわけではなく、近くにある人口規模がより大きい都市（岡山市や倉敷市など）で就職し、そこに住んでいるのだ。だから、農村部の高齢女性には、岡山県内のいずれかには多くの別居子がいた。また、農村部に住む高齢女性の大部分には、岡山県内のい

すれかに少なくとも 1 人の別居子がいた。同居子のいない農村部の高齢女性では、その割合がとくに高く、82.6% にものぼった。そうした別居子は両親のもとに頻繁に行き、高齢の両親の暮らしを常日頃から支援できるだけでなく、緊急の事態が起こったときも、両親のもとにすぐに駆けつけることができる。だから、子供（夫婦）とたとえ同居していないとも、高齢者は農村部に安心して暮らしてゆくことができる（野邊 2000b）。このように、近くに居住する別居子の支援に支えられて、高齢女性は農村部に住み続けることができると推論できる²⁾。

ところで、分散分析と表 6 から、市街地の高齢女性には、岡山市の高齢女性よりも岡山県内のいずれかに多くの別居子があり、同居子がないときにその人数がより多いことが分かる。ただし、その人数は農村部の高齢女性ほど多くはない。数値を示すと、市街地に住む高齢女性では、岡山県内のいずれかにいる別居子の平均人数は、同居子がいるとき 1.04 人であり、同居子がないとき 1.21 人である。さらに、市街地に住む高齢女性の「岡山県内」に居住する別居子は、ほとんどが岡山市、倉敷市、総社市といった高梁市に近い市町村に住んでいた（表 3 を参照）。これらのことから、市街地の高齢女性には「近隣地域」あるいは「市内」に別居子はそれほどいないけれど、近くにある人口規模のより大きい都市に比較的多くの別居子がいるといえる。さらに、市街地にいる高齢女性のだいたい 3 分の 2 には、岡山県内のいずれかに少なくとも 1 人の別居子がいた（表 5 を参照）。

市街地は、備中高梁駅を中心とした地域である。このあたりでは、行政機関、商業施設、医療施設、生活関連施設が整備されているから（野邊 2001），高齢者は農村部よりもはるかに生活しやすい。さらに、市街地の高齢女性にはかなり多くの別居子が自動車で 1 時間以内に実家へ行ける場所にいるだけでなく、市街地に住む高齢女性のうちの 3 分の 2 にはそうした別居子がいる。このように、市街地の高齢女性は近くにいる別居子に取り囲まれているから、市街地の高齢女性は農村部の高齢女性ほどではないとしてもソーシャル・サポートを別居子から入手しやすいと考えられる。

第 3 に、「岡山県外」にいる別居子の居住場所を検討したい。高齢女性の居住する地域によって、「岡山県外」にいる別居子の人数に有意差はなかった。しかし、「岡山県外」にいる別居子の居住場所は高齢女性の居住する地域によって違いがあった。高齢女性が農村部や市街地に居住しているとき、「岡山県外」の別居子の約半数は近畿地方におり、

そこに住む別居子が最も多かった。これに対し、高齢女性が岡山市に居住しているとき、「岡山県外」の別居子は関東地方に住んでいることが最も多かった。

岡山市の高齢女性に関東地方に住む別居子が多かったのは、次のような理由からだろう。「世界都市」となった東京では大阪など他の大都市よりも就業機会が多く、労働条件のよい仕事が多い。そのうえ、岡山市の中心に岡山駅があり新幹線の駅が置かれている。岡山駅は高速鉄道網の中にあり、遠方にある東京からも岡山市へは 4 時間以内で行くことができる。また、飛行機では東京から岡山へは 1 時間ほどで行けるうえに、岡山空港から岡山市へのバスの便は多い。このように、東京から岡山市へアクセスしやすいから、東京に住む別居子は岡山市にある実家の両親を容易に訪問し、交遊をしたり、さまざまな支援をしたりすることができる。だから、岡山市の高齢女性には関東地方に住む別居子が多かったのだろう。ところが、東京から高梁市の市街地（備中高梁駅）へは、新幹線で岡山駅に行き、岡山駅で伯備線に乗り換えて更に 1 時間ほどかかる。農村部へは、備中高梁駅からまた更にバスなどで 1 時間ほどかかる。東京から高梁市の農村部や市街地へは 5 時間以上かかるから、高梁市に住む高齢女性にとって、東京は手軽に交際しうる範囲内にある地域ではない。しかし、大阪から岡山駅までは新幹線を使って 1 時間で行けるから、別居子は大阪から高梁市の市街地や農村部へ 2 時間から 3 時間で行ける。また、高速道路を使って自動車で行けば、大阪から高梁市へは 3 時間ほどで着ける。したがって、高梁市の高齢女性にとって、関西地方は日常的に交際しうる範囲内の地域なのだ。関西地方では東京ほど条件のよい就職先はないかもしれないが、高梁市へアクセスしやすい。そこで、農村部や市街地の高齢女性には、多くの別居子が関西地方にいたと考えられる。

5 結論

本稿の目的は、岡山県高梁市の農村部、高梁市の市街地、岡山市に住む高齢女性の調査データを分析し、高齢女性が人口規模の相違した地域に住んでいることによって、別居子の居住場所にどのような差異があるかを究明することであった。そのデータを分析し、次の 5 点を明らかにした。

(1) 岡山市の高齢女性には、農村部や市街地の高齢女性よりも同じ市内に多くの別居子がいるうえに、少なくとも 1 人の別居子が同じ市内にいる割合も高い。

(2) 農村部の高齢女性には「近隣地域」あるいは

高齢女性の別居子の居住場所

「市内」に別居子はあまりいないけれど、「岡山県内」にある近くの人口規模が大きい都市に多くの別居子はいる。さらに、農村部にいる高齢女性のほとんどには、岡山県内のいずれかに少なくとも1人の別居子がいる。

(3) 農村部の生活環境は整っていないうえに、大部分の高齢者は自動車を運転しないから、高齢者は農村部では暮らしづらいと考えられる。けれども、多くの高齢者が農村部に住み続けている。農村部の高齢女性には、別居子が同じ市内にあまりいないけれど、「岡山県内」にある近くの人口規模が大きい都市に多くの別居子がいる。だから、農村部の高齢女性には、岡山県内のいずれかに多くの別居子がいる。また、農村部に住む高齢女性の大部分には、岡山県内のいずれかに少なくとも1人の別居子がいる。同居子のいない農村部の高齢女性では、その割合がとくに高く、82.6%にものぼる。こうした別居子が支援をするから、高齢女性は農村部に住み続けられるのだと考えられる。

(4) 市街地では、行政機関、商業施設、医療施設、生活関連施設が整備されている。さらに、市街地の高齢女性にはかなり多くの別居子が自動車で1時間以内に実家へ行ける場所にいるだけでなく、市街地に住む高齢女性のうちの3分の2にはそうした別居子がいる。

(5) 高齢女性が農村部や市街地に居住しているとき、「岡山県外」の別居子の約半数は近畿地方におり、そこに住む別居子が最も多かった。これに対し、高齢女性が岡山市に居住しているとき、「岡山県外」の別居子は関東地方に住んでいることが最も多かった。

(注)

1) 農村部、市街地、岡山市の回答者ごとに、「同居」、「近隣地域」、「市内」、「岡山県内」、「岡山県外」といったそれぞれの居住場所にいる息子と娘の平均人数を計算すると、表7のようになる。そして、それぞれの居住場所にいる息子と娘の人数

表7 それぞれの居住場所にいる息子と娘の平均人数（単位：人）

	同 居	近隣地域	市 内	岡山県内	岡山県外	合 計
農村部の高齢女性 N=347						
息子	0.41 (0.50)	0.02 (0.13)	0.12 (0.32)	0.49 (0.73)	0.29 (0.58)	1.32 (0.94)
娘	0.10 (0.33)	0.04 (0.20)	0.21 (0.48)	0.70 (0.87)	0.30 (0.58)	1.35 (1.09)
合計	0.51 (0.54)	0.06 (0.25)	0.33 (0.57)	1.18 (1.14)	0.59 (0.82)	2.67 (1.19)
平均値の差の検定	p<.01	N. S.	p<.01	p<.01	N. S.	N. S.
市街地の高齢女性 N=176						
息子	0.36 (0.49)	0.06 (0.26)	0.06 (0.23)	0.39 (0.67)	0.31 (0.56)	1.17 (0.92)
娘	0.10 (0.30)	0.10 (0.36)	0.14 (0.41)	0.39 (0.71)	0.43 (0.72)	1.16 (1.04)
合計	0.47 (0.51)	0.16 (0.45)	0.19 (0.46)	0.78 (0.97)	0.73 (0.97)	2.33 (1.26)
平均値の差の検定	p<.01	N. S.	p<.01	N. S.	N. S.	N. S.
岡山市の高齢女性 N=169						
息子	0.34 (0.50)	0.07 (0.28)	0.31 (0.56)	0.08 (0.29)	0.34 (0.62)	1.13 (0.92)
娘	0.11 (0.32)	0.08 (0.32)	0.34 (0.62)	0.11 (0.36)	0.28 (0.54)	0.93 (0.97)
合計	0.45 (0.54)	0.15 (0.42)	0.65 (0.86)	0.18 (0.51)	0.62 (0.79)	2.06 (1.13)
平均値の差の検定	N. S.					

(注) 括弧内の数字は、標準偏差。それぞれの居住場所にいる息子と娘の人数について平均値の差の検定をおこなった。

** p<.01, * p<.05

について平均値の差の検定をおこなった。それによれば、農村部の回答者では、同居は息子が多く、「市内」と「岡山県内」にいるのは娘が多い。市街地の回答者では、同居は息子が多く、「市内」にいるのは娘が多い。岡山市の回答者では、同居は息子が多いが、別居する息子と娘の人数は居住場所によって有意差がない。

2) 別居子の居住場所の分析から、高齢女性は近く

に住む別居子にサポートを頼ることができるかどうか、あるいは実際にサポートを仰いでいるかは分からぬ。この推論を実証するためには、サポートの授受の分析が必要であることはいうまでもない。

(引用文献)

古谷野亘・岡村清子・安藤孝敏・長谷川万希子・浅

川達人・児玉好信. 1995. 「老親子関係に影響する子ども側の要因」 『老年社会科学』 16: 136-145.

前田尚子. 1988. 「老年期の友人関係—別居子関係との比較検討」 『社会老年学』 28: 58-70.

野邊政雄. 2000a. 「高梁市の高原部に住む高齢女性の暮らし」 『岡山大学教育学部研究集録』 No.113: 69-85.

野邊政雄. 2000b. 「高梁市の高原部に住む一人暮らしの高齢女性の生活」 『岡山大学教育学部研究集録』 No.114: 47-57.

野邊政雄. 2001. 「高梁市の市街地に住む高齢女性の

暮らし」 『岡山大学教育学部研究集録』 No.116: 43-53, No.117: 35-41.

野邊政雄. 2003. 「地方小都市の高齢女性と別居子の関係」 『ソシオロジ』 47(3): 55-69.

野口裕二. 1991. 「高齢者のソーシャル・サポート—その概念と測定—」 『社会老年学』 34: 37-48.

横山博子・岡村清子・松田智子・安藤孝敏・古谷野亘. 1994. 「老親と別居子の関係—団地に居住する女性老人の場合—」 『老年社会科学』 15: 119-123.